



布門



まこと事  
いたみゆきすまのふる  
くわく

半日筆藏



文政二己卯之年

歲且

日のやや暮れに松辛酉古江  
えりや海を渡る辛酉云々<sup>七十一</sup>  
捨てゝ見る門や ふせん裏辛酉帰風  
もとゆきめぐらすや花の春辛酉保壽  
玉垣よりはまゆゆゆゆゆゆ

始

六千の者

船美

被のあ年後より今般の者

雨丹

幼鳥をばきしてありますか。

エハ

江山

まの戸も多すよほどの事

アリタ

南山

二つある事と云ふ事すば多小

三次

巴流

よほ川代やすら見たり一文字

花雄

ま事はほととごとく小田の鶴

石見

露月

大の事の事すも花もうおの書

梨雪

鶴の飛れ影ひむすぬせ竹の魂

一寺女

松月

ひつちゆきの娘や鏡

餅

ヨシ奈

起石

羽林陽角山に暮れ

エト 国村

お隣もまきのねがまへあい

まう歌ひたまへかひてる

まもよぬすよほの苦む

キヤウ尾  
立體

乾坤之部

厄の日の日よ又素や 七とうす夏初老寫老  
肱曲るもひりひくふたり宿 十丈  
山里のまちありアキラ 六昌  
あ能アモリ 月桂イセ  
まより町アシタカ、馬アシタカ 阿山  
口アシタカのめ日アシタカ春アシタカ 本鄉 護六  
錦アシタカ肉アシタカ余アシタカト  
古年の歌アシタカ 月桂イセ  
如節

鶴アシタカか出アシタカ骨アシタカの雪  
す解アシタカや古アシタカ鳥アシタカ山アシタカ山アシタカ石アシタカ 無已  
並アシタカの盤アシタカかく雪アシタカトアシタカ 大坂アシタカ雲居アシタカ  
魚アシタカ水アシタカのりすうも東アシタカ長アシタカ 伸アシタカ 伸アシタカ  
供アシタカつれて手アシタカおりやものあ  
眼アシタカふきアシタカ春アシタカ小半日アシタカ 文衣アシタカ  
醋アシタカのまよ奢アシタカつやまの雨アシタカ 宇柏アシタカ 露宿アシタカ  
朝アシタカの音アシタカ連アシタカよて書アシタカの鳥アシタカ 古江アシタカ 薙合アシタカ

春雨スミレ ひめミツバチ いの 鶴

蘆洲

鶴のつゝれ卵や 朱角スカク 上総エド 白老  
神づけのねすもぬれて寿の月 美角  
人のまきのとよとより平の風 ヨシタ 川徳  
小糸平ヨシヒラ もまくもまくや 四の筋ヨリス 夏坂元サマハタケ 冬色  
せき開ヨリハタフ や戸ドアよせといふめきわ 庭竹  
曙の蓮ヨウセン あすみや 喜山ミヤ 鶴声  
もむれのまくまくのあすまくヨシタ 一松  
あわくの蓮ヨシタ の葉ヨシタ て籠ヨシタ 左

飛裡スミレ ちの月ムツ いたまイタマ 月ツキ 脣月スカク 古里コリ 可涼コリヤウ  
も園ヨシタ の水仙スイセン 月ツキ まの月ムツ 吳ワガ 金英キンエイ  
多由タユ の水仙スイセン 月ツキ まの月ムツ 石シロ 犁田ヒタチ  
笑タツタツ の水仙スイセン 月ツキ 伊豆イズ 一瓢イチピョウ  
聲ヨシタ の鳥トリ よかましヨカマシ 月ツキ 越中エチホ 甘行カムギ

植物

雨二段咲スミレ 月ツキ

喜山ミヤ

次儲シヅケ 一

梅折や花ノ水もも波

元荷香

梅以て都内をも

南山

退居ももすみ柳の深より

霍江

世の中い柳の根も月ねりも

素蘭

鼻内も春歌

志溪

柳柳庵より水も波ひく

龜雄

よの支の季歌より柳うき

鳳山

鋤枝と脊戸の這入柳

漫<sup>ミラク</sup>

夕風が止むる柳

九十

芽柳や去年の道中の一周忌

春魚

さうよ三月の柳

桃泉

春の柳や柳の年

春庄

大の柳も吟ア柳の柳

石

脊戸の柳夕日は柳よ柳

桃溪

よの柳の見ゆるを

一河

柳一本ゆる柳柳

大坂

魚眼

洛

柳の柳

其文

青柳の柳よ柳よ柳

素白

春の雨梅の下瀧水を下す

佳一

も仰や相手や水の一處タニハ 武陵

峰の影の如くシテ 小

化粧メイク 朝霞アサヒカス 山桜ヤマザクラ 石

下後

新翠

門口の坂カミツカ 雨中ウツクシ 桃モモ オホ

桃鳩モモトリ

夕桜ヨクザクラ 花見ハナミ 道ミサセ うれ

東湖ヒガラ

世道セドウ や出ハシ 来ル 人ハシム 櫻シダレ 万九

下後

月章

散ハラハラ 月ヅキ 素シテ 也カタ 朝アサヒ 光ヒカリ

素蘭ソラン

月の雨梅の下瀧水を下す

月章

月の雨梅の下瀧水を下す

延史

夕茶や三井の末章の連属

一有

花亭のま枝マヂキ トアリ

春崖

さくらのゆづみ川ユヅミカワ トアリ

雲居

松陰マツイニ がまくちすすマムクチスス 也カタ 三都良

素蘭ソラン

木葉の舞ハタケ の花ハナ ほの上

千茅チマツ

蝶鳥テトウ のあめの花ハナ ほの上

花山ハナヤマ

花の木ハナキ 二面ニバン 月ヅキ 月ヅキ

岳輶カツキ

月花の意をみちたり 鳴りの海大坂 宋度  
橋まみの橋りをあらわのま 其雀  
あ常の秋ひ葉は落りうれい イヨ其兆  
そめましの處へ遊フシ きよ輝 曙堂  
かくこすく事、けんれんて居のま 對芦

七手や、さつづけの瞳、一ま 素主  
肩まちや、せすぢ、とほゆ供 美角  
け芋まや、母の氣、入るの星 雨丹

五手のせむるめや 塔の内

寺家

其雀

五手のやね葉あけ、いのま

大坂

柴籬

よせ能や、ひくひく、吹葉籬

大坂

井眉

花籬このや、庭のよし様やと

ま雨

坡や橋て、草のよしよしわ

唯房

芝童

歌の内を、草むさす、心

照列 闇事

道をやすれおもひ、心

木客

えまと荷ぬき、後や、花の寺

ナ 霞霄

生類

夢よゑひほよや下の生  
きよすみの向の取や井戸の蓋 大坂 三度  
きよぢのゆきよ二月  
鳶の上をのむゆきよ二月  
鳥やか口の山林に向ひる 上關 文甫  
風の戸がりよくとみまの鳥 柳知  
新月の夜およそ萬葉小説 石  
きくゆきの歌ひやまの月 松月  
音風

大那よゑのまくらに歸り鳥 雨丹  
歌の月あくびりうすめの子 莖令  
揚ひよせよとよとよとよとよとよと  
町角は肉うつりつとよとよとよとよとよと  
城のまんとよとよとよとよとよとよとよと  
鷹あくとよとよとよとよとよとよとよとよと  
鷹やよとよとよとよとよとよとよとよとよと  
芳一ときようとよとよとよとよとよとよと  
方一ときようとよとよとよとよとよとよとよ

夕月の序や 水の星 桜 泉文  
あらわゆるあらわるよし 鮎の南  
白魚や布の目波浦旭石 一洲  
水東の月のキトのまゝされ 玉浪

混雜之部

篇よりて直す也 混雜像 玖波 浮哉  
とんかくすまうそとまく傀儡 一洲  
津川のまくらを 傀儡師 ミヨシ 富雪

鳴 めぐら 平 ひら 鳴戸 ひらど  
今二首汝平もまき鳴戸 ハ 方平  
席の袖 アシタマ や老 シロ 袖の袖 アシタマ 下鶴尾 素月  
着の名袖 アシタマ 及 アシタマ 宿 スル 石 蒼翠

冥乾坤之部

絶 アラカツ 乾 カニ 空 ムカシ 寂 アシタマ 鳥 トリ  
絶 アラカツ 乾 カニ 空 ムカシ 寂 アシタマ 鳥 トリ 越中 丸外  
絶 アラカツ 乾 カニ 空 ムカシ 寂 アシタマ 鳟 トリ 一洲

さみれやまの尾をきりふ

梶泉

席の戸も開くと山の月

ナ

超古

さるわらぬよしむらの金英

ナ

金英

少すくや涼すくかよひす

筑後

慶五

みすすくらむまくらや春妙絃

エト

道彦

龜のむく人ねぐらむる者

石

巴流

能くよはるの秋や

早

里泉

小涌谷の夕歌やまゆの歌

悟来

悟来

ゆゑや小鳥の息の樹人ゆ

苦吟

起と遙空を設けや夏の月

紫風

青牛の仄夜切やえむれ

文衣

タミヤキ車の轔ちく子

露月

極ひ古一席の風

苦吟

士方

少すくらむの夕伝

紫風

馬鳴て泉の音うるおうれ

芦洲

其の聲よ清めの聲も

筑波

沙鷗

すくまに響く掠り波うれ

下用

羅風

すゝみの里アシタカ守ミサキ山タカヒコ大坂 星譜  
すゝみアシタカは行スル清クモリて扇イニヨシ 松風  
正南ミツナム月ツキやハタケテウタすミツナム  
すゝみアシタカや人ヒトの湯ヨシ檜ヒ原ハラ 卯ミツタチ 玉浪  
江エガタ波ハタケのゆハタケすミツタチ 二流ヨシタチ  
風カキツバタもハタケすミツタチて居リすミツタチ ヨシタチ 可有ヨシタチ  
すドミツタチ色ミツタチ桺ミツタチの木ミツタチの木ミツタチ 梨ヨシタチ 言ミツタチ

### 植物之類

卯ミツタチの木ミツタチの木ミツタチの木ミツタチ エト 太筍  
茅笛ミツタチの木ミツタチの木ミツタチ 日ヒあアハ角カク 雨丹  
茅笛ミツタチの木ミツタチの木ミツタチ 壮ミツタチ女ミツタチ可ミツタチ涼ミツタチ 均秀ミツタチ  
茅笛ミツタチの木ミツタチの木ミツタチの木ミツタチ 古染ミツタチ 花ハナ  
茅笛ミツタチの木ミツタチの木ミツタチの木ミツタチ 雨丹ミツタチ 鳥頂ミツタチ

立まう油ナシ原

立摩原

南方

芦角

立まう油ナシ原カタマリナシモト

エト

鳶塗

立まう油ナシ原カタマリナシモト

古江

立まう油ナシ原カタマリナシモト

壺伯

立まう油ナシ原カタマリナシモト

可然

立まう油ナシ原カタマリナシモト

諸嵐

立まう油ナシ原カタマリナシモト

本市里仙

立まう油ナシ原カタマリナシモト

政波

み妻

立まう油ナシ原カタマリナシモト

石不惚

立まう油ナシ原カタマリナシモト

雨柳

立まう油ナシ原カタマリナシモト

花堆

立まう油ナシ原カタマリナシモト

嘴二

立まう油ナシ原カタマリナシモト

其鶴

立まう油ナシ原カタマリナシモト

主雨

立まう油ナシ原カタマリナシモト

松宇

立まう油ナシ原カタマリナシモト

汝南

立まう油ナシ原カタマリナシモト

雨丹

千葉の里と云ひて

松子實

美角

旅のまよみぬきまよみぬきの湯風

能すもうれのまよみぬきの湯風

早てゆきつゝて風の音うか

大坂

奇閒

あらわせやせむよむけりゆうの鶴

名石

鶴江の因桂殿山家う經

名石

まゆゆくやひりくと紙月

周事

まゆゆくつゝくまゆゆく

之次

玉山

蓮の花よ見よと僕よと聲よと有

之次

之抑

蓮の花よ佛くさりかげりやれ

又

貞之

鳳山

踏雪

鶴江

詩花

周事

玉山

之抑

貞之

口紅紙よまよみぬきの蓮の上

タ鳥やお供りの事

サト

露宿

タ鳥やお供りの事

サト

鳴泉

タ鳥やお供りの事

サト

鳥雪

タ鳥やお供りの事

サト

月章

タ鳥やお供りの事

サト

曾外

タ鳥やお供りの事

サト

江左

タ鳥やお供りの事

サト

月行

魚を賣つて舟にのりて萬のをも石夕光  
依りて船や根河の舟ももと候辛何頼  
其多さやあらそく舟主讀の舟尚海

生類

雲鶴カチて宿借裏カキ用ふ鳥  
志シテ御メテ江カニのまカニ 事カニのむ  
足シテのすシテを鳥シテりシテる  
やシテきシテす峰シテや波シテよ鷦シテ大シテ如仰

歌アミのとアミ日アミのとアミ歌アミす 申アミ高  
ニシテおシテいシテ松シテの木シテ 時シテ鳥シテ 義シテ角  
用シテ手シテてシテゆきシテぬシテのシテよシテおシテ次シテ 花シテ山  
掌シテも小シテ町シテ、老シテ、 雨シテは鳴シテ 徐シテ往シテ  
静シテの浦シテれ道シテ字シテ風シテよ吹シテくわ 曙シテ堂  
飯シテせシテやシテすシテ波シテの橋シテも停シテリシテ 行肺シテ木シテ海  
國シテのやシテおシテ鶴シテ丹シテアシテのシテくシテみシテ 素シテ白シテ  
少シテひシテ鶴シテ立シテ也シテの處シテ白シテ鶴シテ 小泉シテ梅シテ御シテ女シテ

サヌキ

木端

石龜白

致波

金郎

浮武

雨丹

起石

桺知

越中

一蓬

嘴二

ほのきよの事もくじてあまの月  
とんちのやうな故のむかしのい 石  
故きよた、故きよよだの骨故  
盡きよく解るよ、解するよ  
ゆくわく現のあはれこりわ  
日生を結たすれ事や解の解  
斧ぬりうすのまこと様へ  
せりとも笛ふみのす障の事  
下向さむとおひか 芳きわ

高きよめやまの地よ付 下終  
きよめつづけて、教養よ幸 女 英之  
人の面や水の城ひと教養 イヨ 玄平  
育の角よ幸まよ角の付 サ日市 桃流

混雜之部

高きよめやまの地よ付  
考のえ幸まよ角の付  
桃川をよめの角の付  
素主  
一河  
宇指

暮れ山中よりあがまのうり タガ  
唯すよん解のうよかと三属ト ヨシ原  
日向山よりかきくらむ我多 フレコ  
鈴飯ハ加減まのうり 淀の水 一洲

秋乾坤之部

九月やうづくは夜の星ゆ

雨丹

三月やうづくは春のうみゆ  
秋の月やを庵と獨り川 上岡  
ちつねやうたはの鶴をだる歌 イセ  
鶴の川や吹く、歌もりのえ 古江  
さくはくと歌もれすも 日向  
乃く一夕の月も残すも 梅雪  
さくも月と絶景の名あらうよ 一冬  
人のまも残すりやこの川 庭竹  
せうのまつりやこの川 荷舟

三月はさやみかまくら

二十九

秋奉

川あもゑへ草のむづみ

桃泉

さくや小菜の二番もあはる

下総鬼郷

さくや秋の西そよのゆく

麻丸

鶴鳴や波音の歌のそよ

金郎

さくやすくも黒ぬきのまく

雨舟

八部はまくわ山の歌ゆく

梨冠

暁や鷺鳥よとすすめうどん

一洲

彦はまくわ山の歌

其タ

白翁の泉と柳とや牧の約

五

素曉

絆きりや一着深く散歩猿

佐路

宇柏

ふきの草とやすくは原小舟

李長

李長

れいふとすくはせよくめく

ト

芦角

白翁の泉と柳と牧の約

用

松月

智とめくわのうからく頃の秋

楚石

聰水

十の里へはいへれど山

江左

さくすいへるも船や船の水

駆るや月の夜の危庵の月  
かみやるるの月ヨシタ  
南亭ミツ 寛宦  
より始める月ヨシタ 三百の月  
虫ミツ 南亭  
自ら始まる月ヨシタ 月  
路毛ミツ 路毛  
老りと経年を月ヨシタ 露月  
破のあはれ大坂 蟻洞  
さざれつたりや月のもの  
さよの月ヨシタ 月のあはれ  
八庵ミツ 八庵  
於もとゆく徳見の月ヨシタ 千秋

けのまや月ヨシタ 雪雄  
てまや月ヨシタ 春魚  
毎日ヨシタ 月ヨシタ 保壽  
考のものも月ヨシタ 月ヨシタ 保壽  
名也ヨシタ 橙園ヨシタ 五錐  
山也ヨシタ 月ヨシタ 五錐ヨシタ  
伊也ヨシタ 月ヨシタ 月ヨシタ 五錐  
おひやヨシタ 月ヨシタ 月ヨシタ 五錐  
よもすの月ヨシタ 月ヨシタ 月ヨシタ 五錐

彦聖のゆの後もやうやくなれと

きくはるのうかきこころの后の序

女 不染

昭子のへぬをあらわすむと

志溪

育むに、胸もおもひもおのぞき

花雄

ちよ初からとくと木のぬが

久 茉若

娘のまちほのせよひく往く

芝風

丈角のぬくわきう、於のじ魯

三宗

文代の下りくくや歎おもむ

風山

ゆのねのきよもゆえて能のそ

文衣 美角

### 植物之部

一葉ふれや 陰ふき葉のうれ

千可

ねねふくさよ一葉の ああい

月桂

あらや 蒜もみねのう

みか

蒜もや 蒜もみねのう

イセ 淵水

蒜のうねりふけや ねりり

空雨

倩のうのうれ うれ うれ

紫蘿

三次

せまや すみのよみ そろ檜

南塘

毎年すの島のやう 檜の難

松宇

熊の心もハモー 萩の木

一河

豹の毛皮やかく神もとてのす

ヒコ  
仙斧

ふくわの代はけいのひふく

佐州

かくさきと角あくりの上、

ヒコ  
萬羽

狼ぬのむつ小すき

小国

がくのゆきの那入すき

吉安

あくまの勢もあらわすき

英之

和まうまく松瘦なみひ

大坂

節蓬

ぬて人の手をまきや鶴のま

ヨシタ

允人

馬來うひまくかくらみかかく

石

松崎

きくや 犬のあくも自慢す

加計

蝶遊

うくもひよくうきのま

上闇

孤雲

ほくの唐角すけてまくの花

文甫

波麗のあゆみの葉は露おり

素白

せうもくはねくちくふのよ

里仙

紅葉のきみくよ雪散り

三花

さく宿や人氣もなくて村まみち  
すゑあやせの鶴首が鳴すみ  
石 滄洲  
白鷺のりよく音て袖のるくゆ。  
久理  
鶴すゑせばれ圓扇をあせりと  
象賓の年より肥く種ふくむ  
木戸  
對芦

生類之部

虫鳴やつて絶ゆる事

かん

一則

虫鳴や孤城の愁ひを承りて  
約郎のゆきよにやりの春  
文太の仲まひやまきをす  
まきしに鳴や傾く油皿  
吉つまゆ鳥かきうりをす  
おもい東よハ智のみ前印ト  
折枝の煙草ひまく丁のそく  
百の厚きと筆取れ是何と  
丁鳴て後唐本始の山家外  
飛泉

春ノヤ 実込モテテ 葵の果

浦の色ヤ トモアヒテ 駆逐モ

石鳥ヤ 祭事より古ヒ 国の山

ミタニテ 沈モシセテ 蔷薇の峰

角折テ 峰トシテ 蔷薇の峰

植ヨウモモナキヤ 尚の尺の薺

雨の日のモモナカクイリ松の音

升也油移テ 雪山のモモナカ

人立ほきよ無事の峰

一松

雨初

無已

松甫

亀雄

薰姜

湖白

主雨

啼各

彦舟よりセイハセイホウヤ  
猿のリテ猿の木テ 佐鳴モハ  
魂カモモモモモモモモモモモモ

可涼  
以石  
浮哉

### 混雜之部

いづくの句

かのうも神松竹アリ 流れ上 沙  
神の灯の跡モ古ノヨリの月  
ゆきり(まこととすきり)

蒼丸  
桂眉  
羨角

きゆのそんまよりくまよ

三行

踊る浦とあす あどり全

阜池

通のをや何て浦て水の所

石

董令

人を下す鳥の音うねり松生寺

泉

至傑

京にておや利風の因縁

護六

にれやえりもれと魚の音

三行

りぬやは浦とねる網の音

阜西

日射す波せ柳の影

蘆洲

### 冬乾坤

幼の鳥の声の三處流う経

平言

雪洞

内の声の音は皆うて詠小春

告凡

山の音の音をまつたをうめ

百和

旅の音の音をうめふ青の芦

竹葉

地の音の音をうめふとく小と月

桃泉

吉田

佐のやねのとうめへられ

一茶

波やいづれへてまかく、 淇水  
鶴を鳴る、 声を外遊、 里風

たまはれにあひえり、 通、 里風

タ六

喜美

鶴の音より、 鳴り、 野掲

尾道

東翠

まのうゑ付の鳥のひまよ

尾道

翁香

大のまちあくまく、 用を取

巴山

あくまくや、 はねとねの、 伸

唯

淇園

こくや、 夕邊もくねの下、 一河

寺家

玉斧

あくまくや、 山の鶴中、 鶴の行

三京

良山

水鳥の、 あくまく、 行へ

三京

良山

おまめや、 大きな、 おまつ

三京

宇拍

おまめや、 おまつや、 おまつ

三京

松宇

おまめや、 おまつや、 おまつや、 おまつ

三京

霍江

おまめや、 おまつや、 おまつや、 おまつ

三京

其雲

ふとまうむわぬ入てゆくの月  
空月よきにきのれすうもす  
こがくらや油のゆけし小うさ  
ひづりやは月は草すと相あせ  
砂すまふ吸ふれて枯る小川す  
砂すまふ吸ふれて枯る小川す

其仙  
三有  
兩舟  
鳥雪  
乙泉  
露月  
石  
二石  
三石茶邊

供奉して息吹うけすも佛  
大歎す臂をアリテテの鳥  
彌すもか部スモヤモシモ  
モモモヤ火薙、蛇鷹アリ  
アリテテキタモのあくモハ通  
津モト株のたよモハ通  
モハ通モの喰モのあくモハ通  
鶴のあくモハ通モハ通

芝鷹  
志良  
一例  
菊吾  
千可  
雲和  
夕嵐  
濤花  
白星

ねまくらぬすむきむれの宿る

嘯二

升のきよすとし難小て身ひきを

琴女

身のきよすの力もよきよりわ

素白

ちよくらぬすとし難小て身ひきを

格来

大雪や健毛むかはれのすば

湖自

灯と身ひきの役すとよの見

吳老

あゆなぬと身ひきの役すとよの入

鳳山

えよの入ゆの御もととくれ

圭雨

下絃の箇の鶴引と身ひきを

龜雄

晴もよ三絃生羽ちにほよト

西坡

ミタニ

そよぎや笛のよきも草頭

聽水

人へ皆よしん萬のうきよ海

石浦

植物之部

こゑきよすとし難小て身ひきを  
川のくらぬすとし難小て身ひきを  
ねまくらぬすとし難小て身ひきを

思流  
麻丸  
志明

木集

桔梗の下の山の宿の夕日うみ

二六

鯉冬

ゆきの桔梗の夕日うみ

今年松

玉山

貞之

文衣

士方

兵庫

鶴舟

翠雲

沙翁

葉のあやあ賀あら山の夕日うみ  
拂ふ風き遊ひの風す櫻舞の風  
音のいとくすもさすあ櫻舞  
さく舞のかくいなもさくり夕日

志津

江左

辯路

窓丙

岱美

窓官

花雄

雨丹

吉凡

山の木の夜の宿の夕日うみ  
月影の夜すりて山の宿すりて  
大根の太うりて山の宿すりて  
扇舞うて櫻舞うて山の宿すりて  
さく舞うて櫻舞うて山の宿すりて  
扇舞うて櫻舞うて山の宿すりて  
扇舞うて櫻舞うて山の宿すりて  
扇舞うて櫻舞うて山の宿すりて  
扇舞うて櫻舞うて山の宿すりて  
扇舞うて櫻舞うて山の宿すりて

なづくよよのよ松耶

信

藤彦

生類

物丈のいづくすや常千鳥  
すまきの一崩するやうト  
破るく魚簎作る常の鳥  
又松がすくとくの事は  
タカが刻て小鳥ノリの鳥  
タカや鷹のすのうふとく

古江  
蘆洲  
素屋  
野揚  
如節  
乞毛

水をもじる聲を喰ゆ  
あくまの声も聲の支鳴ふ  
聲をよくせくあや比の月  
寒風の甲子流す月代  
今やそり聲の小鳥ノ一  
月と聲と別く音ノ源ノ上  
自テ湖波ノ鴨の音  
ねどり声を浮く小鳥ノ下  
本の歌ノ音ノ少ノ小

やうひくともなはせばうほの鳥  
もはゆるもまうれと鳥の鳴る  
えをさうめの鳴や自故のねぐらる  
やまへりひきのすきよまうる  
鶴鳴よ鳥くつる男うれ  
教約のあむいわくまよる  
男うれとすく雪とトリ鶴とけ  
きくらげよ思つま鶴とけ  
息のみのぬは角のきくられ

大坂  
草舟

無已  
淇汀  
麦坡

嘴ニ  
路山

和切

薰令

羨角

### 混雜之部

幣喧て神のあまする龜卜  
神のあま旗役のものまうる  
在りてあはれ也黒卦未  
遂慶もよ否もくほもひり  
年く少候あはれもすうめ  
ねゆの聲中がれすうちも外

あすの年のもとへはまよ

紙あるとて五度よれりあひへ

せやも新吸ひ

東湖 浮哉

君戻りのあとて扇子を拂ひやむ

手のもの浦

啼谷 松鳩

せば再々三年かや想

桶

ヨシタ

双鳥

下京へ納きのまよそくわ

用事 古江

駿河のまゆはゆくわ

歳暮

うら月やあきのあら松  
月の夜はつれて秋にあきと  
すはる人とあくの鳥

古染 岩冬

きくわくよけで年を

春胡

まくわくやすくみ水車

帰凡

絶は咲魚日がく一年を度

梅御

ほどのと都もくと鈴の音

江山

玄壁

ゆくを想ふ所もやうて神の鳴

そ枝まきく草原の

風あらわすりりり

春とさほのよしの花

玄壁

挂眉

多賀尾の春興

玄壁

草小ねや能ものかくまむ

文衣

日の下か數ほまのせみ

均鳴

練刈る山の山うけ下崩て

白圭

あまきや野が枕かふる

衣

音の頭へおひくはま

挂

音よりよくもまたかからず

嘆

うきや秋草のきくはつせき  
まちめの霜ふ凋すきへきて  
ワカムアモヨ梓のうらがいあし  
今そほ嚴のゆゆよむる  
秋風のそよきうるせきえんみ  
月のわきのくばち下かす  
一ツても虫う帰るいわきもあれ  
りすれて波も甲斐の様鷺  
菖蒲のせきみゆゑをちく下す

二  
やのうた筆のうと鹿  
雄造るね鹿うと鹿も人趣て  
旅向ひするは叱ふ仗  
せききよみ小室、秋半るふ念  
ちとちきき一仗のまに  
萬葉の君うかと見ゆい  
うきうき、皆りすれす  
河、桂、河、桂河衣  
小揚備えまほ池の生離

號の美はまく曾もがくか  
額よ阿ノハ 風 ち 音  
沙さやる入にの月ちに刻て  
寥もゆやくひいけふり  
<sup>ナウ</sup> 44 の左もよ遠ひみぢに向  
うもひ候すちのぬすわを  
称宣のゆきよすけよすけ  
あくへいよくへんの取て  
ひがるもあらうと用一せ索みて

あくまく鳴鳴の口ひやむ

熟筆

蘆洲

あくまく鳴鳴の口ひやむ  
度ひ詫る據ニリ ニリ  
代さうほ山のあの草葉もきて  
仰首のほのまくらやあま  
旅衣まよひ是日のかく  
船も風のゆきよそまみ

桂、洲、玄桂

ウ  
モカミの甲羅アマロみ夢ムカシノ昔後  
銅鑄トウツヤの塵チも磨ハラフれよ  
曉川アサヒガワのくわれば水ミズすの轟クラク  
坂東市戸サカドシトの音オト山伏サンボク  
年イニももや戸トドふきも小コトコトめ  
又アリまきもく拂ハラフれせき  
傍ハタケ花ハナ節ハシヨすく香ハラハラはれ  
ちくまくああアアのうり月ヅキ  
虫ムカシの音オトかく歌カク詠ウニ

二道ニトド間マツカ山サン  
人のまゝまゝりふるのりぬ解ハラハラ  
絆ハラハラのほろくもまももひ  
食ミツのばせぬゆく間マツカ山サン  
か思カモスふかくもかくもかくもかくもかくもかくも  
其シの名メイ神カミふゑもく伴ハラハラ  
玉タマのワワもがまく霞カミカミ

江底の鳴う小鳥が呼ぶ  
風吹草むれの歌の合  
多ねる年の御顔もほれて  
枯葉があすか度の脛  
柳叶は紙ふもとをまく  
萩の秋からまつたらと  
枝移しまく風ふすれまく  
神代村ハ能よ名なほり  
今やの昔はカツハ神の神

湖、河、陸、湖、

毛もく小弓の毒箭射  
テ木の弓を矢の神さん  
江底の草を喰津のぼよ

對芦

湖、河、陸、

鳥もくよ江底の草の原  
草もくよ江水のよみ  
江底の草のわづれよ打さて  
風が吹くと松樹くわく

五

松樹  
芦

東辭の後はよむ哉  
うすじよ御殿の  
強もよきのまゝに旭山  
を縁の新き變化の折  
あて廻の草の序よりて  
三か月めゆる如木難識  
脣をあくねのひびき乍  
あの風月よりてはまち  
ひやれまほのうれ笛とせ

そりてはあきらめ  
人情端様よからと放々け  
も際立たずの彼アキラが  
あす枝那の再入にて  
風のきよふりよ  
蛤

鳴蛙芦鳴蛙

息あもあくいとを勧加掌  
きよふる水鷺めり

六

三花

指芽

可涼

村のきぬ山と直すて  
まほのひる縛り石つま  
月新う木の間よりあこむ  
飛すれども雨空すけ  
け風のちかくと都の處あり  
毛織すまくの解は狀うる  
やまちかくと都の處  
角の音よお其の裡はせむ

涼花芽涼湖花芽

宿の紙被ふるみのあめさみ  
雲あそび日の暮よだらのまきせ  
まんじゆの雲蒸るをすとるる  
一とすのまよはきよだらの鳥  
ほまんて入る雲の有りゆ  
ほある後つねがキヤく  
耕人よ文すがゑく

芽涼花芽涼湖

櫻泉

稀々ひまわりすれど今朝の秋  
あさとひすれ早朝の効風里行  
酒桶が月のあくよ波へきて  
け風と流すやのあやき  
旅人う旅の咲ば来てき  
又鶴よ時を尋る

梨冠 泉  
泉

立ちぬ槐よ竹の様すハ玉

茂

梨冠 泉

傘の偽すまきしれ 洞顔  
勵みるもくもくもくもくもく  
涇飴やくはすやすやすとせん  
車の瓶のやしらももももも  
日縮人のまくらく下りる  
蓮のまくらまくらまくらまく  
牛のまくらまくらまくらまく  
もくと傳子まくらまくらまく  
以花のまくらまくらまくらまく

まみてくらぬ伊勢のあす  
雀子の姫と栗山の有る小や  
利休の筆すねをさし  
おの間よ枝下つもゑのあて  
化よい解うぬ色う毛  
却きよそくかくしを取  
段の脇と胡桃うぐい  
灰ゆくも遙かくよるの傳  
鳥の音のせうする

茂、泉冠、泉茂冠

株掲のちくすみ  
熊いとうよす敷苞の小書  
二三丁おりに舟もなぐりで  
まめのむすびくすが峰森  
紫栗よしの附ある絵因波  
絵のむすびすが峰之書  
絵冊の文字をとち風ふ書き之  
うとくすが峰をぬ人取  
本がまきを鷹子巣へ教へん

窓官

、泉、官冠泉行

嘲る鳥よこそまづまよ

革

得書館の宿活

宇拍

而も鶴のあらわすより  
於あさくおのの事  
水うちよ池より鴨の道つけて  
争ひあとみをほのあき  
即はゆ月の夜と極つて  
もや東柱の山風の音  
鳴

皆のよきをかみあそぼく  
英ひのひよるひりすく  
旅のよきをとく空ひぬく  
至らぬよきほのほく  
代をすこちよれせらむのね  
泣がゆうとゆく飯  
ひゆすやうあるひまし  
あひよれせせんきく  
荒のよき娘の多き聲を

あのそよはの山の音  
十周のまかねもれの音下に  
音づく音の音主

光山

深山の巣、音、音の音の廻  
廊を廻あざつまうす  
ほのひとはれの音ひとと音掉  
蕊の音うけ音をひきまくす  
葉の音うき音机の音うきまくす

兵庫  
猿齊

聲を拂ひて音も本音がり  
音枝やせう音はぬまも  
一音づくゆ音古音も  
やう音煙煙をづく音煙も  
ゆう音め枝の音も  
鳴きとこ枝風も思へ  
床伸すま枝唯すも  
ぐれ刺去へあら音も  
いつも根とくもかぬ中通

早

高、桂高桂高

まほの間も不変ひあつて  
男のむととす鞋りすゆと  
手足もゆくゆくの事に於る  
詠すゆとすも陽が防  
片づくすよめの秋の月  
詠すゆとすよあらてうの  
考の事す詠すゆの秋の月  
ゆく處す詠すゆの秋の月  
かきよれのまほりすゆとす

のとうにまほりすゆとす  
きほの秋の詠すゆの秋の月  
生けやすれども馬のり方  
まほの詠すゆの秋の月の嚴  
粥殿ひすもぬすまほりすゆ  
核のまほの詠すゆの秋の月  
詠すゆとすも陽が防  
記す、事もまほりすゆとす

かのうは纏のねもよどちふ三重の  
波別(波音)れ、穆高(ムカシ)とおを  
あきらめ候(アキラメヒ)事(モノ)

三月の別とあきら候(アキラメ)る  
至(アリ)て脣前(マダラヘン)一(イチ)てきくよ寂(ソラ)  
紙布(シブ)の様(ヨモギ)模(モダル)子(スズクニ)城(シロ)  
板(ハタケ)食(エサ)屋(ヤマ)を差(シテ)る 口(ウロ)  
清(クモリ)戸(ドア)に立(タマリ)て見(ミテ)ゆく  
スマアの江(エマガ)川(カワ)人(ヒト)が(アリ)て  
更(アラ)まゆ肉(ヒツジ)ばかりし粗(アラハラ)

桂(ケイ)眉(メイ)桂(ケイ)眉(メイ)桂(ケイ)

桂(ケイ)眉(メイ)桂(ケイ)眉(メイ)桂(ケイ)  
もよよよ身(カラ)も桂(ケイ)眉(メイ)也  
首(ネコ)の桂(ケイ)眉(メイ)とあきらめの書  
あはとほのものゆくの裏尾(アリタリ)も  
もも娘(ムネ)も桂(ケイ)眉(メイ)とあきらめ  
あきらめ候(アキラメヒ)事(モノ)

桂眉

桂眉

遅矣之部

於より船の列やうて風  
木、松をもあらや山のあ  
れのと松タリの年くわ  
あわやあゆの松の木を  
暑きや毛虫の丸すかねる  
うのちのちのひありもく  
さんよきの耳やつま  
鷺生のあそくす小舟と  
常波

牛棟

九河

里香

常波

牛葉

貫明

孤山

巖平

車江

露衆

鷺一羽松せばアモテレ  
松のあもづくのひきせまう月  
りくのひきせまう月や考の内高所  
孤山やまくは晴りまう月、  
えりのすまう月と遡入りアリ  
花くすり一毛かすりやすりと  
花くすりとくはくはくはくはく  
花くすりとくはくはくはくはくはく  
花くすりとくはくはくはくはくはく

終

御くと入くとあるか事ト  
まめのとくにけやがのと  
十月経船とあすまはり  
ふとほのとくに角うみの月  
一月の後雪とそりにせき  
月おとすや紅葉のやのち  
露衆

江口 池成  
立 桃父



萬版刻所 廣島平田屋橋  
免  
書物仕立 刻師  
廣國度兵衛

